

模写雑考

模写について

南齊の謝赫が著した「古画品録」には、絵画の制作と鑑賞の要素を六法として挙げています。六法の第一が画の本質である「気韻生動」、その他に「骨法用筆」「応物象形」「随類賦彩」「経営位置」「伝移模写」の法を挙げています。これらのうち、模写の重要性を示すのが転移模写です。晋の顧凱之は模写論に「以形写神(神とは心のこと)」と表し、模写の狙いが初めは技術的なところにあっても、究極は心を写し取る学写であることを示しました。

近代の画家、大観や春草などの大家も大いに模写し、時には模写を作品にまで昇華・発展させています。

あらためて、模写の目的を、解り易い言葉で、表現し直しますと、

- (一) 古画の精神を学ぶ。
- (二) 古画の構図、筆法、賦彩を学ぶ。
- (三) 古画を記録し、継承する。

となります。模写を行う動機や理は様々ですが、模写は画家が伝統を重んじるところに成立します。また、模写は古画の持つ時代の隔たりを画家により翻訳する作業とすることができます。それを端的に表す例として、中国画の画題に「倣・・・」とあるのをしばしば見かけます。「ならう」と読みますが、この場合は、筆法や形式を模写することでなく、古画の筆意に学ぶということで、作品そのものは創作であると言われております。模写を行い、原作者の制作過程を追体験することによって、原作の品格を学ぶことになるからです。このことを少し考察してみますと、模写する者(鑑賞者と画作者を兼ねる者)にとって、模写の行為は、自からの観察の結果にもとづいて、筆墨の速さや量などの加減や描く段取り、気分を推理し、一気呵成に筆を走らせ画作します。つまり、原作者の意図や技の工夫を発見して、自分流の再現を試みます。そのイメージの積み重ねが創造的な技や表現の発明につながると考えます。

このように長々と模写についての理を述べたのは、模写は諸家に表現を借りて、自己の表現力を高める有意義な創作活動であるとお伝えしたいからです。

参考文献「模写の魅力・巨匠が学ぶ日本の名画」

模写の実践体験から

実際に、一生懸命に絵を写してみますと、先人の骨法用筆を倣えるだけでなく、しばしば絵の内容や画家のところが自然と伝わってくるように感じる場合があります。また、模写したことがある絵を間近に観ますと、写真で見たよりも精緻であったり、大胆であったり、本物から与えられる印象は誠に感動的なものです。大きな絵に見えていたが、こんなに小さかったのかと驚くこともあります。現実の物ならではの技を発見することもしばしばです。実体験の例として、小出檜重の裸婦像は和筆で描いたに違いないと想像していました。あるとき、本物を見ていたら油絵の中に和筆の毛を発見しました。やはり・推理が当り犯人を見つけたように嬉しかったものです。このことに気づいたので、裸婦は苦手なので、穏やかな日の富士山を描くに当り、キャンバスに和筆を使っ

て、雲、大気、穏やかな山肌などの質感表現に用いてみました。なかなか上手いきました。

模写よりももっと鮮烈な例は、ダ・ヴィンチの解剖図のスケッチですね。精緻に体のつくりを写すだけでなく、体の中のつくり(理)までも知って絵を描こうとした執念には、驚くほかはありません。

これと同じことは、日本画家の伊東深水なども美人画を描くときに裸像を描きそこに着物を書くように下絵を描いておりますね。デッサンの本では、骨づきや肉付きを描き、動きや表情の根源を解説しております。「北斎漫画」は西洋では「ホクサイ・スケッチ」と呼ばれ、印象は絵画に多大な影響を与えました。これはスケッチというよりは画技(表現の手本)として書かれたものです。

観察スケッチの話題に入ってしまったのですが、模写とスケッチの違いは、模写は画意と隠れた表現技法を探索する目的がある点で、観察したままを写すというスケッチとは大きな違いがあるといえます。

安井曾太郎やルオーの絵を見るときには、面白いのは「どこで筆を止めたか」ということを推理するのが面白いと思います。これでもか、これでもかと描き込んで来た絵に魂が入ったときに筆を止めるのですから、渾身一筆の筆づかいがどこかに見当たるはずで、絵を見るとき、どこから描き始めてどこで終わったのか想像すると、どんな気持ちで描き進めていったのか推理が解けてくるように見ることが楽しくなります。墨画研究の文章のなかで、私は「練習にはスケッチが大切」と繰り返し、できるだけ見たままに精緻に書くべきだと主張しています。ユニークな絵を描く家の多くは、精緻な絵がかける上で、表現のためにそれを積極的に変容させていることは見逃せません。…絵の中に1箇所だけ画家の思いの詰まった、人工的な、作意の表現が見つけたとき、感動のために絵の前で突然に足が止まるのでしょうか。模写中に得た発見は、見つけた嬉しさなのでしょう。それをヒントに「俺もやるぞ！」という元気がいただけるのでしょうか。

今後も、出来るだけ多くの「本物の絵を」を見て、倣いたい。そんな思いで、臨画を発表するコーナーを作りました。…「萬家に倣う」練習人であり続けたいと思います。今や、ネットワーク時代。大家の作品や古典を臨画することも、技量や時間を越えたネットワークでの一つではないでしょうか…。